

# 自転車乗りの視点で楽しめる環境をつくることで、地域振興につながる大会を目指します。

(島根県松江市)

特定非営利活動法人サイクリストビュー 代表 **森脇 博史**



## プロフィール

1970年島根県生まれ。大学卒業後、大手百貨店に入社し、鳥取県、大阪府にて勤務。1997年にUターンし、企画会社勤務を経て、2007年に特定非営利活動法人サイクリストビューを設立。理事長に就任。有限会社Plus value取締役社長。

**Q** サイクリストビューが主催する自転車大会への参加者が着々と増えています。運営上の目標参加者数をどのように設定していますか。

森脇：大会を始めた時から、参加者がある程度集まらないと開催できない大会ではなく、たとえ参加者が10名で費用が5万円しか集まらなくても開催できる大会にしようと考えていました。補助金に依存しない大会運営の継続を目標に掲げ、初期に受けていた公益財団法人JKAの競輪補助事業を昨年度から受けていませんが、損失を出さずに運営できています。協賛企業がある大会に比べれば、エイドステーション（水分や食べ物の補給施設）がシンプルだったり、開会式が質素だったりするかもしれませんが、自転車で走るという大会の本質部分をしっかりと充実させているので、参加者が増えているのではないのでしょうか。

**Q** 現在の参加者はどのくらいですか。

森脇：今年の「出雲路センチュリーライド」には、過去最高の700名が参加しました。そのうち県外比率は約75%だったので、約530人が県外からの参加者と計算できます。これだけ県外者が多いと、参加者が初めて走る道であることが多く、安全なコース誘導と管理という側面で、NPOとしての運営能力の限界もありますし、宿泊施設の問題もありま

す。松江は宿泊施設が多いですが、大田や温泉津温泉などは一日に何千泊もまかなうのは難しいです。今年の「石見グランフォンド」には593名が参加し、前泊、後泊を含め290泊が生まれています。2泊した参加者もいました。総合的に考えて、800名くらいが運営

できる限度ではないかと思えます。

**Q** 最近は全国各地でマラソンや自転車の大会が行われていますが、参加者の目線で見た時にサイクリストビューの大会の魅力はどのような部分にあると思いますか。

森脇：以前ウォーキングの大会の企画に携わって分かったことですが、若い人はウォーキングよりもサイクリングを志向しているものの、都市部は信号も車も多いため、走れる環境がありません。島根県には自転車乗りにとって魅力的な道が多く存在しています。石見グランフォンドでは、最後に三瓶山を上る200kmのハードなコースと、180km、140kmのコースがありますが、140kmコースでは江の川に沿って坂を上っていきます。この時の景観は素晴らしく、交通量が少ないのでこの景観を自分で独占しているような気分になれます。

どこまで進んでも信号が無い道、少々急な勾配でも自由に走れる道、車の音が聞こえずに自分の息づかいとペダルの音だけが聞こえる道など、島根県の道の環境は他にはないものです。この魅力を県外の人に伝えていく手段として自転車の大会は適切だと思いますし、道に感動して次の年も参加する人が多いようです。この中山間地域の整備された道は地域資源になりうるのではないのでしょうか。

**Q** PR活動はどのように展開していますか。

森脇：ホームページとフェイスブック、チラシなどを利用しています。自転車に乗る方は20～40歳代が多く、ウォーキングと違って自己発信能力が高いのが特徴です。自分でブログを書く人やフェイスブックやツイッターに参加している人もいて、自転車仲間間でネットワークやコミュニティを作っています。また、ショップを通じて情報を得ている人もいます。参加者の方がSNSを通じて大会を紹介してくれると、それだけで自然に広まっていきます。もっと大々的にPRすれば参加者が増えるのと言われることもありますが、現在の手法でも十分に効果が出ています。

**Q** 観光面での期待は地元でも大きいと思いますが、現在の大会の良さを残したまま、その期待にどう応えていきますか。

森脇：国や自治体の方が視察に来られた時によく言われることですが、行政主体ではなく私たちのようなNPOが継続していくことで生まれる良さがあります。例えば、180kmくらいのロングライドのコースだと一つの自治体の中で完結させることは難しいため、管轄する自治体の連携が必要です。また、行政主体だと観光地をわざわざ通るようなコース設定になることも少なくありませんが、私たちの場合はあくまでも自転車で楽しめる道を、独自の判断で優先できるのです。

その特徴を生かした上で、例えば参加者が宿泊した時に地元の飲食店や旅館と交流が生まれれば、「来年も来よう」という動機につながるはず。大会を通じてまちを知った人が、また違う形で来たいと思ってもらえるように、大会とまちと住民が一体となってアプローチすべき段階になっていると思います。

インタビュー・構成：  
城市奈那（株式会社ジェイクリエイト）